

## 東日本大震災の記録

- ・ 肢体不自由学分野 教授 <sup>いずみ</sup> 出江 紳一
- ・ 医学部 4 号館 3 階
- ・ メールアドレス : [izumis@med.tohoku.ac.jp](mailto:izumis@med.tohoku.ac.jp)
- ・ URL : <http://www.reha.med.tohoku.ac.jp/>

### 【過去：記録集収載分】

## リハビリテーションの力

リハビリテーションは障害者の完全なる社会参加を目指す過程であり、それを支援する技術・仕組みです。リハビリテーション医学を専門とする私達の研究室がこの震災にどのように直面し、復興に向けて社会と繋がろうとしてきたかを記述するために筆をとることにしました。これまで本記録集へ投稿することへのためらいがあり、震災から 11 ヶ月を経過した今も何をどのように書けばよいのかは分かりません。けれども、復興に向けての歩みを支えて下さった方々への感謝を込めて、2つのことを記録しておくことにしました。

一つは、チャリティセミナーの開催です(図1)。平成23年9月に仙台で開催を予定していた「第17回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会」を中止し、チャリティセミナーを9月2日に名古屋で開催しました。大型の台風12号が近づいていたにもかかわらず、参加者は958名に及びました。詳細は日本摂食・嚥下リハビリテーション学会誌15巻3号の巻頭言と334-340頁に記載致しましたので省略しますが、受付開始からどんどん埋まっていく会場に身体が震える感動を覚えました。摂食・嚥下リハビリテーションの仕事に係わる人たちの気合いと情熱にどれほど勇気づけられたか分かりません。

二つ目は、第17回・18回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会の共同開催です(図2)。同学術大会は例年5000人をはるかに超える参加者が、2日間会場を埋め尽くして議論する熱気にあふれる学術大会です。原発事故も加わり日本全体が非常事態という中で、第17回中止決定と同時に、平成24年に第17回・第18回の共同開催することを、鄭漢忠第18回学術大会長が提案して下さいました。「一緒にやりましょうよ」という豪放で温かみのある電話の声は今でも耳に残っています。

チャリティセミナーと、第17回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会の中止に伴う会計により、合計700万円余りの義援金を日本赤十字社に寄附することができました。この場を借りてご支援下さった全ての皆様に深甚なる感謝を捧げます。そしてこの義援金が被災地の復興に役に立つことを願っています。

二つのことは、たまたま日本摂食・嚥下リハビリテーション学会に関わることでしたが、ここには書き切れない多くのことを通して、学び、助けられ、時に貢献し、ということが続けてきました。これには私達が診療や研究で取り組んできたリハビリテーションと重なるものがあり、リハビリテーションの力とはこういうことか、という実感があります。今までどうも有り難うございました。そしてこれからも見守っていて下さいますよう、どうか宜しくお願い致します。



図1:チャリティセミナーのポスター。講師と演題は以下の通りです(講演順)。

- ・才藤栄一(藤田保健衛生大学副学長、同医学部リハビリテーション医学I講座 教授)「嚥下CTの展開」
- ・長谷川賢一(東北文化学園大学医療福祉学部リハビリテーション学科言語聴覚学専攻 教授)「高次脳機能障害による摂食・嚥下障害への対応 -認知症・注意障害を中心に-」
- ・鎌倉やよい(愛知県立看護大学看護学部 教授)「地域高齢者の摂食・嚥下障害への援助」
- ・佐々木啓一(東北大学大学院歯学研究科長、同口腔システム補綴学分野)「大規模震災時の口腔ケア体制の構築に向けて -東日本大震災への対応を通して-

第17回・第18回共催

日本摂食・嚥下  
リハビリテーション学会  
学術大会

摂食・嚥下リハビリテーション  
—夢を語り、未来を描く—

会場  
札幌市教育文化会館  
さっぽろ芸術館  
ロイヤル札幌  
札幌プリンスホテル国際館パミール

日時  
2012年  
8/31(金) / 9/1(土)

会長 出江 紳一  
(第17回 会長)  
東北大学大学院医学工学研究科  
リハビリテーション医学分野  
東北大学大学院定年退任  
肢体不自由学分野

鄭 漢忠  
(第18回 会長)  
北海道大学大学院医学研究科  
口腔顎顔面外科科学教室

事務局 南コンベンションワークス 〒001-9027 札幌市中央区北27条西15丁目6-3 TEL: (011) 727-7740 FAX: (011) 727-7739  
<http://conv-s.com/jsdr2012/> [mail:jsdr2012@conv-s.com](mailto:mail:jsdr2012@conv-s.com)

図2: 第17回・第18回共催日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会のポスター。サブタイトルは「夢を語り、未来を描く」。デザインに注目して下さい。定禅寺通りを散策するクラーク博士とポプラ並木を闊歩する伊達政宗公です。

【現在：平成24年7月】

### 南相馬市立病院ボランティア医師派遣

平成24年3月に当分野教授が南相馬市立病院を訪問し、病院長と協議の上、ボランティア医師派遣を決定、日本リハビリテーション医学会から交通費の支援を受けて4月から当分野医師が定期的に同病院でリハビリテーション医療に従事するようになりました。6月からは岩手県、宮城県のリハビリテーション医学会地方会所属医師もこの事業に参加して下さい、ほぼ週1回の頻度で医療支援を行っています(全て無給)。以下の図は当分野医局長が作成してくれた詳細なマニュアルから一部を抜粋しました。



仙台駅東口代々木ゼミナール前から  
直行バスに乗ります。  
発車時間は  
9:00  
10:00(10時発がお勧めです)  
11:00です。  
2時間弱で原町駅まで到着します。  
乗車しているのは2~3人で混んでいません。  
片道1200円です。



同病院は福島第一原子力発電所から 23km に位置し、現在は院長、副院長ほかのスタッフの努力で正常な病院機能を取り戻しつつあります。

震災直後の原発事故の收拾がついていないときは職員が激減し、10名以上いたリハのスタッフも2名まで減少しました。このときに病院内はリハ治療能力の不足のため高齢者の廃用症候群や誤嚥性肺炎患者で溢れかえり、院長、副院长ともにリハビリテーションの重要性を痛感したとのこと。現在ではボランティアを含めPT, OT, STも10名近くまで復帰し、リハ医療を再開しています。上2枚の写真は同院のリハ室、下の写真は主任理学療法士の小野田修一さんです。2名までスタッフが減少した際も奮闘して、同院のリハを支えてくれました。

7月からは東名ブレースという義肢装具製作会社も医師派遣にあわせ来院してくれることなり、必要な患者様への適切な義肢装具の作成も可能になります。

リハ医師の派遣が今後の正常な病院機能の取り戻しの一助となれば幸いです。